

## ロールシャッハ変数・BVAQ-Jとの相関から見出される 色彩領域へのアプローチによって分けられる部分反応の特徴

筑波大学大学院 (博) 人間総合科学研究科 阿部 宏徳・岩佐 和典

筑波大学心理学系 小川 俊樹

The characteristics of detail responses deviated with the difference of approach to color areas revealed by correlations with Rorschach variables and Bermont-Vorst Alexithymia Questionnaire

Hironori Abe, Kazunori Iwasa and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The new method which we catch the manner of approach, especially detail responses, from the point of view of color was proposed by Abe (2005). Detail responses was divided into two classifications. The detail response which a or some color areas was used as a whole, according to contours of color, was named Non-Cut D and the detail response which a color area was used partially was named Cut D. Although some hypotheses were proposed in this article, these were not verified yet. To research the nature of these responses, the Rorschach test and Japanese version of Bermont-Vorst Alexithymia Questionnaire(BVAQ-J) were administered to 93 college students and 62 of them respectively. Manner of approach variables had correlations with other Rorschach variables and BVAQ-J. This result suggested that Non-Cut D was reflected participant's thought affected by emotions and fertile fantasy and Cut D was reflected his/her objective thought and that Non-Cut D and Cut D were different from D and Dd. From the above, we need to focus the qualitative classification method such as Non-Cut D and Cut D as well as the quantitative classification method used until now such as D and Dd.

**Key words:** the Rorschach test, the manner of approach, Non-Cut D and Cut D

### 問題と目的

これまでのロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テスト）の把握型において、色の存在や重要性はほとんど注目されることはなかった。

例えば、Ⅲカード上部の赤色領域に“火”と反応した場合も、Ⅳカード下部中央の領域に“動物”と反応した場合も同じようにDと記号化されるが、前者は色彩領域をそのまま用いた反応である一方、後者は色彩領域の一部を切り取った反応であり、両者は質的に異なる反応と捉えることができる。これまではこのような違いを（形式分析で）捉えることは

できなかった。

しかし、阿部（2005）は以上のような被検者の色に対するアプローチの差は被検者の特徴の差を表すのではないかと考え、図版上に存在する色彩領域に沿って反応を構成した部分反応をNon-Cut D、色彩領域内の一部を用いず、用いない領域を切り落とした反応をCut Dと名付けて両者を区別した。そして大学生に調査を行った結果、Non-Cut DとCut Dではそれらが持つ秩序性やそれに対する被検者の志向性に違いがあることが示された。

Cut Dは、その内部は均一で等価な刺激を持つ色彩領域の必要としている部分だけを被検者が切り

取って検査者に伝えるという反応形式から、被検者の自由さや自己表現・自己主張のしやすさを表しているなどの仮説が提出されたが、実際に Non-Cut D と Cut D の間には違いがあるのか、また両反応はそれぞれどのような意味・被検者の特徴を映し出すのかについてはほとんど分かっていない。

そこで本論では、Non-Cut D と Cut D との関係、および Non-Cut D および Cut D と他のロールシャッハ変数や質問紙の尺度間の相関から、それらが映し出す被検者の特徴や性質について調査・検討することを目的とする。また、それらと従来使われてきた D や Dd との差についても調査・検討することを目的とする。

## 研究 1

ロ・テストは他の人格検査とは比較にならないほど多くの変数を持っている。変数を大きくカテゴリー分けすれば、把握型（反応領域）、体験型（反応決定因）、反応内容、形態水準となるが、それぞれのカテゴリーは更に多くのカテゴリー・変数に分けられる。これまでの把握型ならば W, D, Dd, S に分けられるし、体系によっては更に多くの変数に分けられる。Non-Cut D や Cut D という変数はこの把握型の変数である。把握型とは異なる、体験型においても運動反応や色彩反応、陰影反応などに分けられ、更に M や FM, FC や C'F など細かく分けられずには数え切れないほど多くの変数が得られる。そして、その多くの変数それぞれに何らかの意味が与えられ、被検者の様々な要因について検討するこ

とを可能にさせている。

よって、まず Non-Cut D や Cut D の把握型変数とその他のロールシャッハ変数との相関関係を調べることによって、Non-Cut D や Cut D がどのような性質を持っているかについて調査を行った。

## 方 法

**調査対象** 大学の講義時間の一部を利用して、調査の目的と概要、謝礼などについて説明し、協力の意志のある者は連絡先を配布したアンケートに記入する形で被検者を募った。

後日、連絡を取り、両者の都合が合った者に大学の実験室に来てもらい、調査を行った。調査前には改めて調査の目的等について口頭および書面で説明し、了解が得られた者には同意書にサインを求めた。

**調査時期** 2004年7月-2005年9月

**調査方法** ロ・テストは Exner 法 (Exner, 1986; Exner, 2001) を用い、大学生93名 (男性35名:女性58名) に施行した。平均年齢は20.1歳 (SD = 1.4)、範囲は18~26歳であった。被検者にはテスト施行後、謝礼が支払われた。

Non-Cut D や Cut D の分類は阿部 (2005) の方法を用いた。反応例を Table 1 に示す。なお、表中の領域番号は高橋・高橋・西尾 (2002) のものを用いた。また、形態水準の判定にも同著の形態水準表を用いた。分類・コード化の妥当性については、第一筆者と第二筆者のうち、テスト施行者がコード化を行い、もう一方がチェックを行った。

Table 1 Non-Cut D, Cut D の例

	Non-Cut D	Cut D	Outside S
I	人間・窓 (DdS26)	人 (D2・D4), 手 (D1)	門 (DdS32)
II	火 (D2), 動物2匹 (D6), ロケット (DS5)	動物 (D1), 灯台 (D4)	顔 (DdS30が目, DS5が口)
III	荷物を持った二人 (D1), リボン (D3)	人 (D9), 虫の頭 (D7)	壺・上半身の服装 (DdS41)
IV	人の横顔 (DdS29)	靴 (D6), 人 (D7)	横顔 (DdS24の下方)
V	なし	人 (D7), ワニの頭 (D10)	ネズミのしっぽ (DdS29)
VI	なし	天狗の顔二つ (D1)	門 (DdS30)
VII	なし	横顔 (D1)	器 (DS7)
VIII	山 (D8), 顔 (DS3), 花 (Dd40)	動物 (D1), 魚 (D6), 山 (D4)	犬の顔 (Dd26の上の S)
IX	動物の顔 (DS1), 花 (D2), 花瓶 (DS8)	リンゴ (D4), 枝 (Dd34)	レンズ (DdS32)
X	クモ (D1), 人 (D9), 葉 (D12), 顔 (D2を目, D10をヒゲとし, 輪郭を指定しない場合)	悪魔 (D8), 青虫 (D4), カニ (D7)	顔 (DdS42, 検査者が依頼する前に S 領域を自ら輪郭として区切った場合)

Table 2 把握型スコアの記述統計

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
R	28.04	9.27	14	72
W	14.29	6.04	2	29
D	8.69	6.45	0	42
Dd	5.06	3.84	0	24
W%	52.61	18.63	7.69	92.86
CutD%	27.05	14.41	0	65.71
CutD	7.59	6.17	0	45
Non-CutD%	19.73	8.95	0	42.22
Non-CutD	5.53	3.54	0	21
OutsideS	1.05	1.09	0	4
感情の言語化困難	20.69	5.43	7	29
空想体験の欠如	13.55	4.97	7	29
感情同定の困難	20.63	6.61	8	40
感情体験の欠如	7.76	2.36	3	15
内省力の欠如	14.77	2.18	12	22

## 結果と考察

今回の調査で得られた把握型変数の記述統計を Table 2 に示す。

### Non-Cut D と Cut D 間の相関関係

Non-Cut D および Cut D と把握型以外のロ・テスト変数との関係について見る前に、Non-Cut D と Cut D の間の産出可能性の関係、相関関係を調べることにした。両反応間に相関関係があるのならば、両反応は区別する必要はあまりなく、Non-Cut D と Cut D は被検者の同じ要因を映し出している可能性が考えられるからである。

阿部 (2005) の方法に従うと、V・VI・VIIカードでは Non-Cut D は定義上あり得ず、I・IVカードにおいても可能性は 0 ではない (例：I カードの DdS26 に対する“人間”や“窓”など) が、これらカードにおいてインクプロット内の空白領域のみを用いる S 反応はほとんど見られない。以上より、II・III・VIII・IX・X のいわゆるカラーカードにおける Non-Cut D と Cut D 間の頻度の相関関係を調べることとした。

カラーカードにおける反応数を制御変数とした、Non-Cut D と Cut D 間の Spearman の偏順位相関係数を調べたところ、 $rs = .14$ であった<sup>1)</sup>。これらの結果より、Non-Cut D と Cut D の頻度間には共変関係はないことが示された。色彩 (領域) という我々の視知覚にとって重要な要因に対し、被検者がどのように接するかを映し出す Non-Cut D と Cut D 間の質

的な差も踏まえると、この 2 つの反応は質的にも量的にも関連のない、異なる反応であると考えるのが妥当であると思われる。

### Non-Cut D と Cut D が表すもの

阿部 (2005) と同様の方法で Non-Cut D% と Cut D%、W%、また D% と Dd% を算出し、それぞれの変数と空白反応 S および把握型以外の変数間の Spearman の順位相関係数を調べた。その中で  $rs = .25$ 以上、または  $rs = -.25$ 以下の相関があった変数を Table 3 に示す。なお、標準的な Exner 法では D% や Dd% のように百分率を用いることはないが、今回は Non-Cut D% や Cut D% との比較のためにあえて百分率を算出し、比較対象として用いている。

#### 1. Non-Cut D が表すもの

把握型・反応領域はこれまで被検者の認知の形式やパターンまたは思考と関連付けられることが多かった。認知や思考を感情と対置する存在と考えるならば、把握型の変数は一般に感情が反映される他の変数と無相関か負の相関を示すと考えられる。しかし、部分反応変数 (Non-Cut D%・Cut D%・D%・Dd%) の中で Non-Cut D のみが Afr と有意な正の相関が見られた。また、Non-Cut D は部分反応

1) なお、実質的な意味はないが、(全 10 カードの) 反応数 R を制御変数として、Non-Cut D と Cut D 間の Spearman の偏順位相関係数を調べたところ  $rs = .30$  ( $p < .01$ ) であった。

変数の中で唯一ラムダ (L) と有意な正の相関が見られなかった。これらの結果から、Non-Cut D は感情への関心と関係があることが示された。

この結果は、色が感情と関係があると考えられてきたことと、Non-Cut D が色彩領域に沿って反応を構成した部分反応であることを考えると、自然なものであると考えることができる。Non-Cut D には被検者の感情の処理や制御に関する特徴や感情によって影響を受けた思考が反映される可能性が高いと考えられよう。

また、感情から刺激を受けるので複雑な思考が阻害されるのか、① Non-Cut D は Zd と間に負の相関

が見られ、② A や Bt という頻繁に出されやすい反応と正の相関が見られ、Blends とは相関が見られない、③ 個性的な反応の割合である Xu% と正の相関が見られるという結果から、Non-Cut D は「情報の取り込み」(Exner, 2000) が少なく (Zd ↓<sup>2)</sup>), 単純で (A & Bt ↑, Blends と相関無し), 了解はできるが主観性の混ざった個性あふれる (Xu% ↑) ものごとの捉え方を表すと考えられる。

D や Dd との差について考えてみても、Non-Cut D は部分反応変数の中で唯一ラムダや Blends と相関が見られないことに代表されるように、Cut D はもちろん、D と Dd とともに似ていないユニークな反

Table 3 把握型スコアと他のロールシャッハスコア間の Spearman の順位相関係数

	CutD%	Non-CutD%	W%	D%	Dd%
F	.33**	.17	-.33**	.29**	.23*
FMa	-.25*	-.14	.25*	-.24*	-.14
ma	-.34***	-.08	.27**	-.15	-.32**
CF	-.38***	-.13	.37***	-.18	-.35***
FT	-.28**	-.01	.19	-.14	-.15
m	-.34***	-.06	.26*	-.16	-.27**
SumY	-.10	-.11	.15	.02	-.26*
SumC	-.28**	.04	.21*	-.05	-.27**
A	.10	.31**	-.21*	.22*	.02
Bt	-.10	.30**	-.06	.09	-.03
Ex	-.39***	-.03	.33**	-.25*	-.21*
L	.38***	.13	-.34***	.30**	.25*
WSumC	-.31**	-.03	.28**	-.08	-.33**
FM+m	-.29**	-.04	.21*	-.18	-.21*
es	-.29**	-.09	.24*	-.16	-.24*
Adjes	-.25*	-.09	.20	-.17	-.15
a	-.27**	-.21*	.29**	-.22*	-.27**
2AB+(Art+Ay)	-.13	-.28**	.25*	-.16	-.29**
X+%	-.06	-.04	.08	.06	-.25*
Xu%	.12	.26*	-.21*	.08	.31**
CF+C	-.35***	-.12	.34***	-.14	-.36***
Afr	-.03	.35***	-.18	.12	.10
Blends	-.36***	-.18	.35***	-.21*	-.35***
Zf	-.48***	-.19	.43***	-.37***	-.32**
ZSum	-.46***	-.25*	.44***	-.40***	-.32**
Zd	-.15	-.27**	.24*	-.27**	-.16
PER	.19	-.04	-.17	.02	.26*
Isolate/R	-.27**	.07	.18	-.05	-.23*
3r+(2)/R	-.23*	.05	.12	.01	-.25*
MOR	-.29**	-.15	.29**	-.26*	-.16
AB	-.13	-.20	.18	-.08	-.31**
S-CON	-.01	-.26*	.11	-.08	-.07

\* p < .05 \*\* p < .01 \*\*\* p < .001

応であると考えられる。

## 2. Cut Dが表すもの

Cut Dは部分反応変数中、最もラムダとの相関が強い。これはCut Dが、色彩領域（全体）が持つ形態には注意を向けずに、色彩領域内の一部の形態的特徴に被検者が自身の関心に基づいて強く引きつけられているから生じることを考えると自然なことであろう。Cut Dは部分反応変数中、最も「現実を客観的に認識」（高橋・北村，1981）する能力や客観的な思考と関係があると考えられる。

Exner（2000）はラムダの高さを「回避的」なスタイルと関連付けてしばしば語っているが、阿部（2005）が指摘したように、Cut Dは一樣（と仮定されるよう）な色彩領域の一部こそが被検者自身の反応（行動）には必要だと主張・表現している反応であるという形式的側面を持っている。また、Isolate/Rと負の相関が見られることも含めて考えると、ラムダが高くてもCut D%が高い被検者の場合は必ずしも単純に“回避的”であるとは言えない可能性もあるのではないかと思われる。

FTと負の相関が見られているのでCut D%が高い者は（Sum T = 0の解釈である）「親密な対人関係、特に相手と触れ合うことが必要とされるような対人関係の場面では非常に用心深い」が、同時にCut D%は「社会的交流を持つことにあまり関心を持っていない」（Exner, 2000）ことを表すIsolate/Rと負の相関が見られているので、対人・社会的関心が低いことを反映している可能性はむしろ否定される。

Cut Dが客観性を反映することとも関連付けて考えると、Cut D%が高い者は目に見える行動としては立ち止まったままであるが、慎重に対象となる他者について検討を行い、自己に過度にとらわれることなく対応ができる（3r + (2)/R↓）ことなどを表すのかもしれない。

DやDdとの比較ということになると、Ddと同じ相関関係が多くの変数で見られることからCut DはDdに近い反応であると考えられる。しかし、Ddで見られるような主観性やユニークさ（Dd：X+% ↓・Xu% ↑）はCut Dには見られない。質の高いDdは知的で批判的な態度の人に見られる（高橋・北村，1981）と考えられてきたが、Cut Dはより純粋な知的側面の性質が反映されると考えられるかもしれない。

2) 正の相関が見られた変数には↑、負の相関が見られた変数には↓を付けて結果を表現することとする。

## W, Non-Cut D, Cut D間の相互関係

Non-Cut DとCut D個々の性質だけでなく、Table 3をW%とロ・テスト変数間の相関関係も含めて見直すと、多くの変数でW%またはCut D%が大小の極になり、Non-Cut D%がその中間（ややCut D%寄り）に存在するというパターンが見られた。この結果は阿部（2005）において、把握型の変数と秩序に対する選好尺度（鈴木・桜井，2003）との間に見られた関係と符合する。これらの結果からも、Wがインクプロットという（外的もしくは内的）構造に沿った反応であり、Non-Cut Dがある程度構造に沿いながらもある部分では構造に沿わない中間的な反応、Cut Dがインクプロット構造に最も沿わないWとは対極にある反応であると考えられる。

しかし、その一方で（先ほど見たように）Non-Cut DのみAfrと有意な正の相関関係が見られたように、いくつかの変数ではNon-Cut Dのみが関連を持っている変数も少なからず見られた。また、それとは逆に、ラムダなどNon-Cut Dのみ相関が見られないものも存在した。これらの結果からは、Non-Cut DがWおよびCut Dの間に存在する中間的な反応であるだけには留まらず、Cut DやWとは質的に異なる被検者の性質を表すというユニークな反応である可能性が示唆される。

この結果を図に表すとFig. 1のようになろうか。

### まとめ

今回の調査の結果、まずNon-Cut DとCut Dの間には相関は見られず、両反応は質的にも量的にも異なる反応である可能性が示唆された。

また、Non-Cut DおよびCut Dとロ・テスト変数のそれぞれの相関関係から反応の意味について考察された。Non-Cut Dは色という構造に従った反応であり、色はこれまでロ・テストにおいて感情と関連付けられて考えてこられたことを考えると、この反応が被検者の感情を反映する可能性は十分に考えら

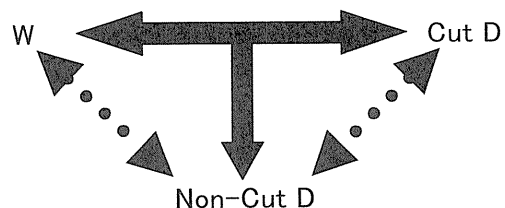


Fig. 1 W, Non-CutD, CutDの関係

れよう。実際、感情としばしば関連付けられる色彩反応のいくつかは Non-Cut D と繋がっていることが多い。例えばⅡ、Ⅲ、Ⅸでの“火”やⅩでの“花”や“葉っぱ”などのように。このような可能性や知見の通り、Non-Cut D は Afr と正の相関があることが認められ、Non-Cut D が被検者の感情によって影響を受けた思考やものごとの捉え方を表す可能性が示唆された。Non-Cut D は色という枠組みに沿った反応であり、(体験型を構成する)色彩反応は色という中身を用いた反応という繋がりから、Non-Cut D はこれまで別々なものとして捉えられてきた把握型と体験型を繋ぐ接点となるかもしれない。

また、Cut D は部分反応中でラムダと最も強い正の相関が見られ、Dd とは異なり形態水準との関連があまり見られなかったことから、より客観的で純粋な思考と関連がある可能性が示唆された。これまで、ものごとの捉え方、情報処理の仕方という思考や認知を表す変数として扱われてきた D や Dd は被検者の感情や主観性を帯びていることが示されたのとは対照的である。Cut D に似た Dd の割合が高い被検者として、「強迫神経症、精神分裂病(統合失調症)、脳器質疾患、精神遅滞が見受けられる」(高橋・北村, 1981) という。Cut D は Dd に近い反応ではあるが、一致しない点も少なくない。Cut D がこれらの臨床群ではどのように現れるかは興味深いところであり、今後調査する必要があると言えよう。

W も含めて相互関係について考えると、ロ・テスト変数と把握型変数との間の相関関係で、 $W > \text{Non-Cut D} > \text{Cut D}$  または  $W < \text{Non-Cut D} < \text{Cut D}$  という関係がしばしば見られることから、 $W - \text{Non-Cut D} - \text{Cut D}$  が一直線上に並ぶような関係である可能性が示唆された。しかし一方で、Non-Cut D が W および Cut D と異なる性質を持っていると思われる結果も見られ、Non-Cut D が W および Cut D とつながりを持ちながらも、独自の特徴を持ったユニークな反応である可能性が示唆された。

## 研究 2

研究 1 で述べたように、Non-Cut D・Cut D という分類は色彩領域を被検者がどのように扱うかに基づいて作成されている。そして、色は感情と関連付けて語られる。よって、D や Dd という分類よりも被検者の感情の認知や制御に関する特徴が反映されると考えられる。

感情をどのように捉えるか、または対処するか(の巧拙)に関する臨床心理学的概念といえはアレキシサイミアが思い起こされる。アレキシサイミア

とは、主観的な感情を述べるのが著しく困難で、外的な事象の些細な部分にこだわるようなコミュニケーション様式を有し、欲動に関する空想が欠如している古典的心身症患者に見られた認知・感情的特徴に対して Sifneos (1973) が名付けた語である。Taylor et al. (1997) は、アレキシサイミアについて「否定的な感情を体験していることは認めるがその制御が困難である人々に見られる」と述べている。

もし、Non-Cut D・Cut D という分類が D や Dd という分類よりも被検者の感情の認知や制御に関する特徴を上手く捉えるとするならば、Non-Cut D・Cut D という分類の方がよりアレキシサイミアやその要因を映し出すと考えられる。

## 方 法

研究 1 でロ・テストを施行した 93 名の内、後半の 62 名(男 24 名, 女 38 名)に対してロ・テスト後に Bermond-Vorst Alexithymia Questionnaire 日本語版(以下、BVAQ-J)を施行した。BVAQ-J は 櫻村・小川 (2005) が Vorst & Bermond (2001) がアレキシサイミアを測定するために作成した BVAQ を日本人用に再構成したものである。

BVAQ-J は“感情の言語化困難”(7項目)、“空想体験の欠如”(7項目)、“感情同定の困難”(8項目)、“感情体験の欠如”(3項目)、“内省力の欠如”(5項目)の 5 つの因子からなる 5 件法の尺度であり、これまでのアレキシサイミアを捉えるための尺度よりも幅広く包括的にアレキシサイミアを捉えることが可能である。信頼性および妥当性も 櫻村・小川 (2005) によって検討されている。

## 結果と考察

BVAQ-J 下位尺度の記述統計を Table 2 に示す。

研究 1 と同様の方法で Non-Cut D% と Cut D%, W%, また D% と Dd% を算出し、それぞれの変数と BVAQ-J 下位尺度間の Spearman の順位相関係数を調べた。その結果を Table 4 に示す。結果、Non-Cut D% と空想体験の欠如尺度との間にも有意な負の相関 ( $r_s = .27, p = .03$ ) が見られた。言い換えると、Non-Cut D の頻度が高い者ほどしばしば空想に時間を費やすということである。W% や D% などは BVAQ-J 下位尺度との相関はまったく見られなかった。

全体反応 W はインクプロットというただ一つの図形(選択肢)に被験者自身が持っている記憶像の何が当てはまるかを検索、考えることによって産出

Table 4 把握型スコアと BVAQ-J 下位尺度間の Spearman の順位相関係数

	CutD%	Non-CutD%	W%	D%	Dd%
感情言語化の困難	.14	-.01	-.08	.04	.04
空想体験の欠如	.05	-.27*	.12	-.14	.04
感情同定の困難	.13	.06	-.06	.10	-.02
感情体験の欠如	.04	-.01	-.06	.02	.07
内省力の欠如	-.08	.15	.00	-.07	.17

\* p &lt; .05 \*\* p &lt; .01 \*\*\* p &lt; .001

される。よって、W とは一つの可能性についてあれこれ考えた結果産出されたものであると言える（選択肢・小×検索量・大）。Cut D は部分反応であることから、Cut D は「全体が分割されて多数化することによって」（辻, 1997）選択肢、可能性は増加するが、被験者自身が持っている記憶像を当てはめるだけで（各）色彩領域全体の形態に沿おうとはしない反応である（選択肢・大×検索量・小）。

それに対して、Non-Cut D は（Cut D と同様に）「全体が分割されて多数化することによって」選択肢が増加した状態で、更に色彩領域の形態に沿おうとあれこれ考えた結果得られる反応である（選択肢・大×検索量・大）。Non-Cut D の多さは、何時でも、どこでも思考や空想を働かせる能力や傾向が反映された結果であると考えることができよう。

この結果は、研究 1 の Non-Cut D は単純な反応であるという結果とは相容れないようにも見える。これに対して明快な答えは今のところ出すことはできない。しかし、あえて述べるならば、Non-Cut D の多さは被検者内の主観的な感情を帯びた、幅の狭い、固定された思考や空想が同じところを回りながら働いていることを示していると考えられるかもしれない。

また、他の結果としては、W% や Cut D% は BVAQ-J のどの下位尺度とも相関がなかったにもかかわらず Non-Cut D% だけ相関があったという結果は、研究 1 で得られた Non-Cut D のユニークさを確かめる結果でもある。

今回、BVAQ-J の下位尺度の一つと関連があっただけなので、この結果だけではっきりとした結論を出すことはできないが、今回の結果は D・Dd という分類よりは Non-Cut D・Cut D という分類の方が被検者の感情の認知や制御に関する特徴をより上手く捉えることを示す一つの結果とはなろう。

### 総合考察

調査の結果、Non-Cut D と Cut D はそれぞれ異なる

特徴的な性質を持っていることが示された。Non-Cut D は、感情によって影響を受けるが故に複雑な思考が阻害され、被検者内の固定された思考や空想が強く反映された、了解はできるが主観性の混ざった個性あふれるものごとの捉え方を反映している可能性が見出された。一方、Cut D は客観的なものごとの捉え方や思考と関係があることが示された。

これまでの部分反応変数 D・Dd と比較すると、Non-Cut D は D と Dd と異なるユニークな反応であることが、Cut D は Dd と似ているが主観性が含まれないより客観的な思考や捉え方を反映している可能性が示唆された。

以上より、部分反応を Non-Cut D・Cut D という形で分けることによって、これまでとは異なる知見が得られる可能性が示唆された。

### 引用文献

- 阿部宏徳 (2005). インクプロット把握における色彩の重要性 - 色から見た把握型 -. ロールシャッハ法研究, 9, 15-24.
- Exner, J.E. (1986). *The Rorschach: A Comprehensive System. Volume 1: Basic Foundations*. New York: John Wiley. 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫 (監訳) (1991). 現代ロールシャッハ・テスト体系 (上). 秋谷たつ子・空井健三・小川俊樹 (監訳) 1991 現代ロールシャッハ体系 (下). 金剛出版.
- Exner, J.E. (2000). *A Primer For Rorschach Interpretation. Rorschach Workshops: Asheville, NC*. 中村紀子・野田昌道 (監訳) 2002 ロールシャッハの解釈. 金剛出版.
- Exner, J.E. (2001). *A Rorschach Workbook for the Comprehensive System, Fifth Edition. Asheville, NC: Rorschach Workshops*. 中村紀子・西尾博行・津川律子 (監訳) (2003). ロールシャッハ・テスト ワークブック (第 5 版). 金剛出版.

- 樫村正美・小川俊樹 (2005). 感情抑制がもたらすアレキシサイミアの行動化に与える影響. 日本心理学会第69回大会発表論文集, 972.
- 片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法. 金子書房.
- Klopfer, B., Ainsworth, M.D. & Klopfer, W.G. et al. (1954). *Developments in the Rorschach technique. I: Technique and theory.* New York: World Book. 京都ロールシャッハ研究会 (訳) (1957). *ロールシャッハ法の発展 I.* (非公刊)
- 鈴木公基・桜井茂雄 (2003). 認知的完結欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 74(3), 270-275.
- Sifneos, P.E. (1973). The prevalence of 'alexithymic' characteristics in psychosomatic patients. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 22, 255-262.
- Taylor, G.J., Bagby, R.M. & Parker, J.D.A. (1997). *Disorders of affect regulation: Alexithymia in medical and psychiatric illness.* Cambridge University Press. 福西勇夫・秋元倫子 (訳) (1998). *アレキシサイミア感情制御の障害と精神・身体疾患.* 星和書店.
- 高橋雅春・北村依子 (1981). *ロールシャッハ診断法 I.* サイエンス社.
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2002). *ロールシャッハ形態水準表 包括システムのわが国への適用.* 金剛出版.
- 辻 悟 (1997). *ロールシャッハ検査法.* 金子書房.
- Vorst, H.C.M. & Bermond, B. (2001). Validity and reliability of the Bermond-Vorst Alexithymia Questionnaire. *Personality and Individual Differences*, 30, 413-434.

(受稿3月22日: 受理5月18日)